

家族的雰囲気生む距離感の近さ

レバンガ北海道ボランティア

「前売りチケットの発売枚数が多いそうだよ」「忙しくなりそうだなあ」。対千葉ジェッツ戦が行われた11月30日、ボランティアの平恒裕さん(71)と川畑春夫さん(66)は、午後4時前からスタッフビブスを着けて、きたえーるのアリーナの持ち場にスタンバイしました。

この試合では2022-23シーズンからBリーグに新設された「ユース育成特別枠」で選手登録した内藤耀悠選手(道文教大付属高校2年)が、リーグの最年少出場記録を達成するかが話題になっていました。また日本代表の富樫勇樹選手(千葉ジェッツ)を目当てのファンも多く、午後7時5分試合開始なのに、開場前から観客が入り口に並び始めました。

レバンガ北海道が募集をしているボランティア活動は会場設営・撤収と試合時の受付や観客誘導です。きたえーるのメインアリーナは1、2階に固定の観客席がありますが、Bリーグでは試合の興奮が間近に伝わるコート接近のシートが四方に設けられます。

平さんと川端さんのこの日は、そのプレミアムシート席の案内や誘導が主な活動。試合時間が近づくにつれて入場者はどんどん増え、二人は忙しくアリーナ内を動きます。この日の入場者は3,500人近く。「開始まで慌ただしいけれど、試合が始まると落ち着くので、交替でビブスを脱いで観戦も楽しめます」。

同じくアリーナで観客誘導をしていた杉本紀さん(73)は前日の会場設営にも参加。Bリーグがスタートした2016-17シーズンからのベテランです。学生時代に軟式野球やバドミントンをしていたスポーツ好きで、社会人になってからはスポーツと縁遠くなっていたことから、定年後はファイターズの



プレミアムゲート入り口で受付を担当する札幌新陽高校の生徒

ボランティアなど、いろいろなスポーツボランティアを積極的にこなしています。

「ほかのプロスポーツがオフシーズンになる、秋から春にかけて試合があるのでうれしい」という杉本さん。Bリーグボランティアの魅力は「距離間の近さ」といいます。バスケットボールは会場が屋内で冬でも暖かく、目の前で選手のスピード感あふれるプレーを体感できるアリーナ競技。「選手やチームスタッフとも交わる機会は多く、家族的な雰囲気でボランティアができますよ」

試合時の運営では入口のチケット確認や関係者の受付業務、試合後の会場撤収作業などがあり、試合前の設営だけ、会場案内だけといった時間を区切ったボランティア参加も可能です、この日も午前中にはプログラムへのチラシ折込を担当した人もいました。

レバンガボランティアの登録者は約150人。コロナ前の2019-20シーズンより減りましたが、感染対策をこころがけてボランティアの活動は続けました。ほかにも札幌新陽高校の生徒や大学、専門学校の学生もボランティアとして活動しています

レバンガ北海道のボランティアは現在も募集中。参加希望の問い合わせは011-555-5113(レバンガ・ボランティアスタッフ担当)まで。



「加齢性難聴」

健康診断の聴力検査で「加齢性難聴」と診断されました。

音を聞く指標はデシベル(db)で表されます。正常が0dbで、25dbが聞こえないと軽度(小さな音が聴きづらい)の難聴。40db以上は中等度(普通の会話が聞きづらい)、70db以上は高度(普通の会話が聞きとれない)、90db以上は重度(耳元で話されても聞き取れない)になります。

私の場合、低音は正常値と軽度の境あたりの音は聞こえますが、左右とも高い音を聞く力は中等度直前の40db近くまで落ちていました。

日本の軽度以上の難聴者は人口の11.3%にあたる1,430万人(日本補聴器工業会などのデータ)といえます。先天性の場合や、ウイルス性、あるいは大音量を受けたことが原因で中途失聴となる場合もありますが、高齢になるにつれ聞こえなくなる加齢性難聴は、超高齢化社会の進行で急増中です。

加齢性難聴は一般に50歳ごろから始まり、男性では65~69歳で43.7%、70~74歳で51.1%、75~79歳で71.4%が、女性ではそれぞれ27.7%、41.8%、67.3%が軽度以上の難聴という報告があります。なぜ年を取ると聞こえづらくなるのでしょうか。

話し声、車の音、街中のざわめき—私たちの生活のなかにあるさまざまな音は、空気の振動として私たちの耳に入ってきます。空

気のない真空の状態、そんな環境に身を置いたことはないのですが、そこでは音は聞こえないそうです。

空気の振動は、耳たぶから外耳道を通して中耳の鼓膜に伝わり、耳小骨という小さな骨で増幅されます。それをさらに奥の内耳の蝸牛というカタツムリのような形をした器官にある有毛細胞で振動から電気信号に変えられて、それを受け取った脳が音として認識します。哺乳類も鳥類も、魚類も有毛細胞が音を認識するのに重要な働きをしているのは同じです。

有毛細胞は正常な状態では整然と並んでいて、入り口側が高音域を、奥側が低音域を担当します。この有毛細胞が壊れると難聴が起こります。加齢性では手前の有毛細胞から徐々に壊れていくので、私の場合もそうですが、高音から聞きづらくなります。

高齢者の難聴には、外出先で危険を知らせる音が聞こえず事故にあう心配があります。また会話が聞き取れず、わかったふりでもやり過ごし、次第に社会に対して壁ができ、それが認知症につながるというリスクもあります。

音を聞き取るのに重要な有毛細胞は、一度壊れると再生は不可能とされていましたが、最近になり鳥類や魚類では再生することが分かってきました。それではヒトでもと、さらに研究が進んでいます。私が生きているうちの有毛細胞再生はなかなか難しくそうです。

「40dbより聴力が落ちると補聴器も視野に入りますよ」と耳鼻科のお医者さん。視力をおぎなうメガネに比べて、補聴器の普及は欧米にくらべて日本はとて低いのこと。高価だということもありますが、その理由をもっとよく知りたいところです。<未知>